

ケン・キージー『カッコウの巣の上で』

— 管理社会のメタファーとしての母性 —

馬 場 聡

I. 対抗文化小説

ケン・キージー (Ken Kesey, 1935-2001)¹⁾によって1962年に世に送り出された『カッコウの巣の上で (*One Flew Over the Cuckoo's Nest*)』は、1960年代のアメリカ対抗文化を象徴する小説の代表である。反体制という旗印の下、当時の若者たちによって形成されたアメリカ対抗文化は、ドラッグ・カルチャー、ヒッピー、ロックン・ロール等の特異な文化を産み出した。対抗文化は文字通り、既存の体制側の文化に対する対抗軸を提示する形で発展を遂げたゆえに、それらの文化の担い手たちは、いわばアウトサイダー的なスタンスを取った。作家ケン・キージーは、まさにカウンター・カルチャーの旗手として1960年代アメリカ対抗文化を先導する活動を行っていた。トム・ウルフ (Tom Wolfe) の『クール・クール LSD 交感テスト (*The Electric Kool-Aid Acid Test*)』(1968) は、ケン・キージーをカリスマ的リーダーとする実在したヒッピー集団〈メリー・プランクスターズ〉の活動を描き、当時の若者の聖典としてベストセラー・リストに長期間リストアップされた。ウルフによれば、キージー率いるプランクスターズの活動は、二つの軸に大別できるという。一つはLSDで酩酊し、ロックバンドの演奏を最新の照明機器でライトアップし、恍惚状態を得る「アシッド・テスト」。もう一つはメンバーがサイケデリック・ペイントされたバスでアメリカ大陸を横断し、伝統的、体制的な社会に意義申し立てを行い、市民をドラッグで酩酊させ、覚醒させる、いわば啓蒙活動である。キージー一味の活動は1950年代ビート族の反体制スタンスを引き継ぎ、コミュニケーションにおいて麻薬による覚醒を求めたが、反文明的なビート族と異なるのは、最先端のオーディオ機器に代表される現代文明を肯定した点であろう。本論で扱う『カッコウの巣の上で』は、アメリカ対抗文化の担い手たちに最も支持された小説のひとつであり、そのテキストは、当時の時代性、文化の諸相を随所に盛り込んだ名作といえるだろう。

フレドリック・ジェイムソン (Fredric Jameson) は1960年代を「第一世界内部

において植民化されている人々——すなはち少数民族、辺境居住者、女性…も等しく人間となったのが60年代なのだ(482)と分析するが、ジェイムソンが述べるように対抗文化期には、家父長制、ジェンダー、人種などが政治、社会的議論の対象とされてきた。事実、アメリカにおいては、旧来の家父長制への問題提起としてウーマン・リヴ、また人種差別政策への疑問の提示としてキング牧師らを中心とする公民権運動などが、社会的なムーヴメントとして起きた。本論で扱う対抗文化小説『カッコーの巣の上で』のテキストは、人種、ジェンダーといった問題に対して重要な示唆を与える。具体的に言うならば、まず、混血インディアンが作品の語り手として設定されていること、次いで舞台となる精神病院に入院する男性患者たちを管理するのが、女性である看護婦長ラチェッド (Nurse Ratched) であること。ジェイムソンが、1960年代を時代分析する上で提示したジェンダー、人種というこの二つの軸が、アメリカ対抗文化を代表する本作品を解釈する時に、極めて示唆的な役割を果たす。

本作品の舞台となるオレゴン州の精神病棟についてであるが、その病棟内は看護婦長ラチェッドのもと、「コンバイン (Combine)」に適合するように、人間を画一化する仕事が行われている。「コンバイン」とはアメリカ社会を管理統制する組織であるが、語源的には「二つのものを束ねる」という意味であり、また一般的には、農業用の刈り取り、束ねる機械、つまり、均一化する機械を意味し、本作品においては、アメリカの体制に適合する人間を画一的に製造する組織としての役割を果たしている。この精神病院において入院患者たち(すべて男性)は、婦長ラチェッドの絶対的な権力のもとで従順な生活をおくっている。ラチェッド婦長はコンバインのエージェントであり、男性患者たちをその圧倒的な権力によって管理、掌握しているのであるが、批評家バリー・リーズ (Barry Leeds) がこの病棟の状況を、「アメリカ社会の最も抑圧的な面」(14)と指摘しているように、病棟は管理国家アメリカの、いわばミニチュア・モデルであると考えることができる。

しかし、この精神病棟に、赤毛のアイルランド系アメリカ人、マックマーフィー (McMurphy) が入院してからというもの、病棟内の様相は大きく変貌を遂げることになる。マックマーフィーは、語り手チーフ・ブロムデン (Chief Bromden) をはじめとする患者たちを鼓舞し、病棟を管理するラチェッド婦長との対立を深めていく。本稿では、管理社会アメリカのミニチュア・モデルといえる精神病院の支配者として、なぜ女性であるラチェッドが要請されるに至ったかを分析することに主眼をおいて、本作品を解釈していきたい。

Ⅱ. 母権制精神病棟

本作品の舞台である精神病棟で生活する患者は、すべて男性であり、彼らはコンバインのエージェントである婦長ラチェッドの、強大な権力によって管理されている。ラチェッド婦長主導の精神病棟の様相を、患者、デール・ハーディング (Dale Harding) の発言からみていきたい。

“In this hospital,” Harding says, “the doctor doesn’t hold the power of hiring and firing. That power goes to the supervisor, and the supervisor is a woman, a dear old friend of Miss Ratched’s; they were Army nurses together in the thirties. *We are victims of a matriarchy here, my friend, and the doctor is just as helpless against it as we are.*” (Keseey, 90) [イタリック体は筆者]

この引用から分かるように、患者たちの生活するこの病棟は、女性である理事長、婦長らの絶大な力によって運営されており、男性である患者、また、医師にしても、彼女らの権力の前にはまったく無力である。ハーディングがこの病棟の患者たちを、「母権制的状況の犠牲者」と表現するように、本作品においては、女性であるラチェッド婦長の権力は圧倒的である。ハーディングは、患者たちにとって婦長は「慈悲の天使にして母」(58) であると言うが、ラチェッドの身体表象には、母親としてのイメージが付与されていることにも注目すべきである。フロムデンが、「製造段階において巨大な胸をとり付けるという誤りがあった」(5-6) と語るほどに婦長の胸は大きい。この婦長の身体表象から、患者たちの母親としてラチェッドを位置付けることはたやすい。レイモンド・オールダマン (Raymond Olderman) は、婦長の巨大な胸を「母親中心主義」(39) の象徴であると指摘しているが、患者たちが、母親としてのラチェッドに全面的に依存していることは明らかである。患者たちの婦長への依存を証左する事実として、患者たちの大半が強制入院ではなく、自主入院であることを挙げることができる。外の社会における生活への恐れから、患者らは自ら希望して「慈悲の天使にして母親」である婦長ラチェッドに依存し、病棟での生活を送っているのだ。ミシェル・フーコーは学校、監獄、工場、軍隊と並んで病院を権力に自発的に服従する主体を生産する国家装置として捉えているが、自主入院を希望する患者たちの姿の背後に、国家装置としての精神病院を見ることができよう。

エーリッヒ・フロム (Erich Fromm) の「母権理論の今日的意義」(1970) では、バッフフォーフェンの母権理論の、現代社会にける再評価を意図した論考がなされ

ている。フロムは、父権制システムが機能不全をおこしていると主張し、その原因として、アメリカ対抗文化期に注目された女性の地位向上や、青年の改革運動を挙げている。アメリカ対抗文化期の女権拡張運動は、父権制を根幹から揺るがした重要なファクターであったし、また学園紛争等の改革運動は、父権的権威を真っ向から否定したのであるから、確かに父権的な勢力が、当時の社会においては危機的な状態にあったといえよう。このように考えるならば、父権的システムが危機にあった対抗文化期の本作品において、母権制的状況を孕む舞台が描かれていることには、社会的な時代背景との密接なつながりを見出すことができよう。対抗文化は近代式の父権制社会システムに潜在する暴力と、その限界を露呈させた。ハーディングが言う「現代の母権制の巨大な力」とは、アメリカ対抗文化期に象徴的な、父権制に打撃を与える勢力と考えることができよう。

Ⅲ. 患者たちのカルテ

この節では、ラチェッド婦長主導の精神病棟で生活する各患者たちが精神を病み、病棟に収監されるに至った背景について検討してみたい。男性である患者たちが一様に、女性に対する何らかの問題を抱えた上で、入院するに至っている点を中心に分析を進める。

入院患者ビリー・ビビット (Billy Bibbit) には、典型的なマザー・コンプレックスの傾向が見受けられる。ビリーと彼の母親の関係は極めて親密で、彼はとうに30歳を越えた大人であるにもかかわらず、母親への依存の傾向が強く、母親の方もビリーを未だ子供として接している。

Billy was talking about looking for a wife and going to college someday. His mother tickled him with the fluff and laughed at such foolishness. "Sweetheart, you still have scads of time for things like that. Your whole life is ahead of you." "Mother I'm th-th-thirty-one years old!" She laughed and twiddled his ear with weed. "Sweetheart, do I look like the mother of a middle-aged man?" (281)

ビリーは結婚や大学進学への希望について母親に話すのだが、母親は彼を子供扱いして取り合おうともしない。母親のビリーへの過度の愛情、あるいは子供への干渉は明らかである。ビリーと母親との関係を推しはかる上で興味深いのは、彼が持つ吃音症状との関連である。ビリーは重度の吃音の症状を持つのだが、注意を払うべきは、彼がはじめて吃音を発症する契機となった言葉についてである。

“Can you recall, Billy, when you first had speech trouble? When did you first stutter, do you remember?”... “The first word I said I st-stut-tered: m-m-m-m-mamma.” (128)

この引用から明らかとなるように、ビリーが吃音を発症する契機となった言葉が、母親を意味する語“mamma”であることは、彼と母親との関係を探る上で重要な鍵となる。成人してからのビリーは、母親について語る際に吃音の症状がひどくなる。また、物語の後半の病棟内でのパーティー後、ビリーがマックマーフィーによってあてがわれた娼婦キャンディー（Candy）と性的関係を結んだ直後に、吃音はすっかり消えてしまう。しかし、娼婦キャンディーとの情交の後、一時的に消えたビリーの吃音症状は、ラチェッド婦長が事の顛末を彼の母に告げると言った瞬間に再発するに至る。バーバラ・ルーパック（Barbara Lupack）はビリーにとってラチェッド婦長、そして実の母は“double despot”（90）であると評するが、ビリーの吃音症状の契機がこの二人の女性にあることは、彼が持つ母親、あるいはルーパックが言うところの代理母という「母なるもの」へのコンプレックスを、露呈させている。娼婦キャンディーと関係を持った瞬間に、ビリーの実母へのマザー・コンプレックスは克服されたかのように見えたが、ルーパックが言うところの代理母ラチェッド婦長によって、一時的なその克服は、もちろん崩されてしまった。病院において患者たちの代理母であるラチェッド婦長は、ビリーを管理する上で、彼のマザー・コンプレックスを最大限に利用して、その支配を強固なものにする。

“What worries me, Billy,” she said — I could hear the change in her voice... “is how your poor mother is going to take this.” (301)

ラチェッド婦長は、ビリーが自分にとって都合の悪い行いをしたときに、決まって母親のこゝを持ち出して、ビリーを自分の意のままに扱うのだ。いわば、「母性」を自分の支配を強固にするための道具として使用するラチェッドの姿が、浮き彫りにされていることは、本作品における権力という問題を把握する上で注意を払うべき点ではなからうか。

本作品のビリー・ピビットのように、母親の支配から逃れられない男性像は、1960年代の複数のテキストから観察される。カート・ヴォネガット（Kurt Vonnegut）による、サイエンス・フィクションの手法を用いた戦争小説『スロウターハウス5（Slaughterhouse-Five）』（1969）の主人公ビリー・ピルグリム（Billy Pilgrim）にも、

母親との関係において類似した関係が窺える。ビリー・ピルグリムは、ビリー・ビッドと同様に、母親の過度な管理の下に置かれている。また、興味深いことにビリー・ピルグリムもまた、精神に異常をきたしているのだが、その原因の一つが、母親との関係ではないかと思わせる部分を引用してみよう。

He always covered his head when his mother came to see him in the mental ward—always got much sicker until she went away.... She was perfectly nice, standard-issue, brown-haired, white woman with a high-school education. She upset Billy simply by being his mother. (102)

ビリー・ピルグリムは精神病棟において、母親が面会に来ると露骨に拒絶の姿勢を示す。ビリー・ピルグリムの母親は、もうひとりのビリーの母親と同様に、過度に子供に対して干渉する。ピルグリム・ファーザーズを連想させる「ピルグリム」という父権的な名前からも、彼の母権的な存在に対する反駁を見て取ることができよう。これら二人のビリーの類似点に関しては、バーバラ・ルーパックが指摘するところであるが(134)、同時代に共存するテキストの主人公が、母親に対して極めて類似した傾向を露呈することは、何らかの時代的な共通点を暗示しているのではないだろうか。

1960年代を代表するホラー映画、アルフレッド・ヒッチコック(Alfred Hitchcock)の『サイコ(Psycho)』(1960)の登場人物ノーマン・ベイツと彼の母親との関係にも、前述の二例と非常に類似する構図が見うけられる。ノーマン・ベイツは母親の強い影響下に育ってきたが、その母親の再婚に憤慨し、母と義理の父を殺害してしまう。しかし、ノーマンは、自分が母を殺したという事実を消し去りたい願望から、解離性人格障害を患い、ノーマン、母親の二つの人格を持つようになる。ノーマンの人格が好意を寄せる女性に対して、母親の人格は徹底的に敵意を剥き出しにして、息子ノーマンを自分だけのものにしようとして彼女を殺害するに至る。このシーンは、『カッコーの巣の上で』のビリー・ビビットが結婚したいという願望を、母親が拒絶するシーンと類似している。また、ノーマンが母親について語る時に吃音の傾向を示す点についても、ビリー・ビビットとの共通点が見えてくる。バーバラ・クリード(Barbara Creed)は、『サイコ』のノーマン・ベイツの母親のイメージを「取り込み、むさぼり食うように、息子を脅かし」、「ノーマンの人生のあらゆる面を支配する」(144)存在だと指摘する。クリードのこの分析は、ジュリア・クリステヴァ(Julia Kristeva)のアブジェクションの概念を援用してなされているが、クリステヴァが『恐怖の権力』において指摘する、「魅惑的にして忌避す

べき」(80)母親がもつ二面性こそが、『カッコーの巣の上で』、『スローターハウス5』、『サイコ』という、1960年代作品群における母権を解釈するひとつの鍵になる。母という存在が持つ庇護的で慈愛に満ちた母性という面、それに対して、子供に介入を行う権利を持つ存在としての一面、この二つの側面こそが『カッコーの巣の上で』における強大な権力を持つラチェッド婦長の権力の構造分析に、多くの示唆を与えることを後に改めて検討してみたい。

本作品の語り手であるチーフ・ブロムデンは、ネイティヴ・アメリカンの父と白人の母親とを持つ混血の青年である。ブロムデンは聾啞者を装い、病棟において一切のコミュニケーションを拒絶しているのだが、彼が聾啞者を装うに至るには彼の母親が大いに影響している。ブロムデンは偉大な酋長であった父親を白人の母親が「小さくしすぎたから、もう戦うことができなくなった」(207)と語る。かつて偉大な酋長であったブロムデンの父親は、白人の女性を妻とすることによって、ネイティヴ・アメリカンとしてのプライドを喪失することになった。ブロムデンの父親と母親を巡っては、人種、ジェンダーという二つの軸が交差し微妙な関係を作り出している。ブロムデンの父は「男性」というジェンダーによって母親よりも優位に立つが、ブロムデンの母は彼女が属する「白人」という人種によって優位にたつ。この交差した二つの軸の不安定な状態は子供であるブロムデンを不安な状態に陥れる。ブロムデンによれば、彼の父親は、アルコールへの依存を断ち切れずに死んでいったという。

白人文明の象徴であるブロムデンの母親によって、ネイティヴ・アメリカンとしての尊厳を失った彼の父親と同様に、ブロムデン自身もネイティヴ・アメリカンとしてのアイデンティティを確立できず、いっさいのコミュニケーションを拒否するに至った。ブロムデン自身の語りによると、彼が聾啞者を装い、コミュニケーションを拒絶するに至った契機は、以下のように述べられている。

But I remembered one thing: it wasn't me that started acting deaf; it was people that first started acting like I was too dumb to hear or see or say anything at all. It hadn't been just since I came in the hospital, either; people first took to acting like I couldn't hear or talk a long time before that. (197-198)

この引用から分かるように、ブロムデンが聾啞者を装うようになったのは、周りの人々が、彼を話すことも、聞くこともできない人物と捉え、振舞ってきたからだという。テキストの中では、ブロムデンが軍隊にいた頃、そしてさかのぼっては小学校時代においても、周りの人々が彼をあたかもそこに存在しないかのように無視し

つづけてきた経緯が述べられている。ここで明らかにしておきたいことは、混血ネイティブ・アメリカンであるブロムデンを無視してきた人々が、白人たちであったということである。ブロムデンが住むネイティブ・アメリカンの部落に、ダム建設を画策する白人たちが調査にきた時の逸話を見てみたい。調査にきた白人たちは話しかけたブロムデンに対して、以下のように振舞った。

The other two, John and the woman, are just standing. Not a one of the three acts like they heard a thing I said; in fact they're all looking off from me like they'd as soon I wasn't there at all. (201)

ここには、ネイティブ・アメリカンに対して、「そこに存在しないかのように振舞う」白人たちが描かれているのだが、ブロムデンの語りは、ラルフ・エリソン (Ralph Ellison) が『見えない人間 (*Invisible Man*)』(1952年) で明らかにした、白人社会の中で不可視の存在として扱われてきたアフリカ系アメリカ人の叫びに共鳴する。

本作品の至る所で、ネイティブ・アメリカンの部族が白人文明に侵食されていく様子が、ブロムデンの幻視の語りによって織りこまれているが、注意を払うべき点は、ブロムデンが、必ずしもネイティブ・アメリカンとしてだけの属性を持っているわけではないことである。批評家トニー・タナー (Tony Tanner) はブロムデンを、「観念的なインディアン像で、アメリカ大陸の原始的生活の巨大な生命力の典型」(406) と位置付け、白人機械文明と対極に位置するものとしているが、ブロムデンは必ずしもプリミティブなネイティブ・アメリカンとして一元化できない。白人文明に対して、プリミティブなネイティブ・アメリカンという二項対立を見出すことは、いささか安易過ぎる考え方であるように思われる。なぜならば、ブロムデンは母方、つまり、白人の姓を名乗り、一年だけ通った大学では、電子工学という白人機械文明の象徴といえる学問を学んでいるという事実を、無視することはできないからである。ブロムデンが持つ白人と、そしてネイティブ・アメリカンの二重の属性こそが、二つの視点を持った語り手を可能にしている。見えにくい、確実に人々に忍び寄るコンパインの管理の手に気づかぬ他の入院患者とは異なるブロムデンが持つ二つの視点は、救世主マックマーフィーの力を借りつつ、確実にその支配の手を可視化している。語り手を混血という設定にした由縁は、白人として、またネイティブ・アメリカンとして、両方のヴィジョンを持つブロムデンにこそ、社会の見えにくい構造を把握できるようにすることにあるのだ。

病院を実質的に支配するラチェッドは、「正確で効率の良い、秩序を保った世界

を作ることを夢見ている」(27) というが、婦長のこの願望は、アメリカ社会を牛耳る組織であるコンバインが意図するところであることは明らかである。婦長ラチェッドは、「コンバイン」という組織のエージェントであるとされるが、そのコンバインは「銅線とクリスタル・ガラスでアメリカ中を覆い尽くして」(255) いるという。コンバインというメカニスティックなネットワークのエージェントであるラチェッド婦長もまた、機械のイメージが濃厚に付与されていることは興味深い。

I see her sit in the center of this web of wires like *a watchful robot*, tend her network with mechanical insect skill, know every second which wire runs and just what current to send up to get the results she wants. (26) [イタリック体は筆者]

この引用から明らかなように、病棟を支配するラチェッド婦長には機械仕掛けのロボットのイメージが与えられている。メカニスティックな婦長の身体表象は作品の随所に見られるが、彼女は文字通り機械のような正確さで、コンバインの支配する社会に適合できなかった患者たちを、作品の舞台である精神病棟において修理、矯正する役割を果たしている。母権制精神病棟において強大な権力を握るラチェッド婦長の身体に、機械のイメージが付与されていることは極めて興味深い。いわば機械文明の象徴であるラチェッドと、自然豊かなコロンビア川沿いにあるネイティヴ・アメリカンの部落で育ったブロムデンとは恰好の対照を成す。先にも述べたとおり、ブロムデンの語りは、白人機械文明に侵食されるネイティヴ・アメリカンの部落の様子をテキストに織りこみ、「私にはコロンビア川の滝の音が今でも聞こえる」(77) というように、部族の土地の豊かな自然を背負っているが、単純に「機械文明」対「自然」という二項対立を立てることはできない。

ブロムデンは「大学で電子工学を学んだ」(27) 経験があり、軍隊では「電気技師のアシスタント」(27) をしていたという事実は、ブロムデンという語り手の存在を、必ずしも自然という範疇にとどめておきはしない。事実、テキストの随所に見られる精神病棟における管理の様子は、極めて詳細な機械的な作業にデフォルメされて描かれている。ブロムデンがアメリカ社会を牛耳る組織と考えるコンバインにしる、その機関のひとつである精神病院にしる、延いてはラチェッド婦長の身体にしてみても、ブロムデンの語りは極めて機械的な描写に徹しているのだから。もちろん、ブロムデンはメカニスティックな体制を批判しているのではあるが、体制の権力を機械的な物として観察する基底には、彼が電子工学を学んだという事実があるのだ。フレドリック・ジェームソンは、「第一世界の内部において植民化されて

いる人々…すなはち「少数民族」、辺境居住者、女性…も等しく人間となったのが60年代なのだ(483)と主張するが、ブロムデンが語りうる存在になり得たということは、公民権運動に代表される、実際にアメリカ社会で起こった現象と連動してはいる。また、アメリカ社会の中でサバルタンとして位置付けられるネイティブ・アメリカンが、白人主導の体制の権力を告発するためには、体制側の論理を援用しなければならなかった。ポストコロニアル批評家、アーニャ・ルンバ (Ania Loomba) が言うところの、「主人から借用した言葉」(278)をもって語る存在としてブロムデンを捉えることができよう。ブロムデンは病棟、あるいはコンパインの権力を、しばしば機械的なイメージを付与して語っている。白人機械文明に属する電子工学を学んだブロムデンが、その知識を用いて体制の権力をメカニスティックな描写で語ることは、ネイティブ・アメリカンというアメリカ社会におけるサバルタンが、「主人の言葉」を用いて白人主導の体制の実情を暴いていると考えられる。彼が白人とネイティブ・アメリカン両方に属し、自然、機械文明、両方の視点をもつ、ハイブリッドな存在であることは、本作品の語り手としての必要条件と言えよう。混血というハイブリッドな身体、複眼的な視点をもつブロムデンこそ、見えない管理の手が忍び寄る精神病棟での顛末を鋭く語りうる存在なのではないだろうか。加えて、ブロムデンのハイブリディティーは、自己のアイデンティティーに不安を与える側面をも内包しており、彼が精神に異常をきたす大きな要因となっているであろうことも指摘しておきたい。

ビリー・ビビッドやブロムデンに彼らの母親、あるいは母権が大きな影響を及ぼしているのと同様に、患者デール・ハーディングは妻に対して特異な感情を持っている。ハーディングは自分の妻、ヴェラ (Vera) が他の男性と関係を持っているのではないかと、妄想を抱く。グラマーで性的に強いヴェラと対照的に、彼はマスキュリニティー (masculinity) を持ち合わせていない。ヴェラはハーディングの女性的な面に対して嫌悪感さえ抱いており、「私に会いに来る男は誰でもあなたのしなやかな手首より夢中になってくれるわよ」(174)とハーディングをやりこめる。ハーディングは、自分の男性性の弱さから、ヴェラが他の男たちになびくのではないかと不安を募らせ、そのことが彼が精神を病む原因になっている。

批評家パリー・リーズは、ハーディングの妻であるヴェラが「セクシャリティーを武器にして夫を従属させている」(27)と指摘しているが、先に見た、ビリー、ブロムデンと同様に、ハーディングが妻ヴェラという女性にコンプレックスを持っていることは、注目に値する。入院患者たちが女性に対して極度のコンプレックスを持ち、一様にマスキュリニティーに欠けることは、テキストの複数の部分から明らかになる。

But in any case, the point you bring up simply indicates that you are a healthy, functioning and adequate rabbit, whereas *most of us in here even lack the sexual ability* to make the grade as adequate rabbits. (64) [イタリック体は筆者]

これはハーディングがマックマーフィーに語る部分であるが、男性性に満ちているマックと男性能力を喪失している患者たちが対比されている。非父権的、女性上位的傾向にある病棟において、母権ラチェッドに隷属する患者たちは、皆一様に男性性を持っていない。詳しい分析は後に回すが、いわば患者たちは婦長によって去勢され、マスキュリニティーを喪失した存在なのである。

ラチェッド婦長に代表されるような強権をもつ女性たちがいる一方で、患者たちを取り囲む環境に父権的な人物は存在しない。先に指摘したように、ネイティヴ・アメリカンの偉大な部族の酋長であった語り手ブロムデンの父親が、次第にその力を失っていく過程は、本テキストにおける、父権喪失の状況を最も良く示している。ラチェッド婦長が主導の女性上位的状況の下で、父権的、あるいは男性的な権威が皆無の精神病院の様子が様変わりするのは、マックマーフィーという新たな入院患者が登場してからである。

IV. 救世主マックマーフィー

婦長ラチェッドの管理のもと、従順に生活することを強いられていた患者たちはマックマーフィーの到来によって各々の自信と尊厳を取り戻していくことになる。マックマーフィーは刑務所での強制労働から逃げ出すために、精神異常を装って、舞台である精神病院に入ってくるようになった。語り手ブロムデンによると、マックマーフィーは「我々をコンバインから救い出すために空から舞い降りた巨人」(255)であり、テレビから出てきた西部劇の「カウボーイ」(189) のようだという。ブロムデンが語るように、マックマーフィーはマスキュリニティーに溢れる屈強な救世主としてキャラクタライゼーションがなされている。病棟にやってきたマックマーフィーの過度と言うべきまでの男性的なキャラクターは、他の入院患者の非男性的な性質と極めて対照的である。マックマーフィーのアイルランド人のステレオタイプなイメージ、つまり、短気で、赤毛で、男らしいキャラクターが付されていることにも一考の余地がある。

さらに注目したいのは、ブロムデンがマックマーフィーを、「かつてのパパの話し方に少し似ている」(11) と述べていることである。かつて、部族の偉大な酋長で

あったブロムデンの父とマックマーフィーを重ねて見るブロムデンは、この新しい入院患者を、病棟に不在であった父親的存在として見ている。批評家ルース・サリバン (Ruth Sullivan) は、マックマーフィー、ラチェッド婦長、ブロムデンの關係に、父親、母親、息子というエディプス三角形を見出せると指摘しているが、母子の双数關係で成り立っていた病棟に到来したマックマーフィーによって、この病棟にはエディプス的構図が表出してくる。病棟に来るやいなや、病棟における父親的な救世主マックマーフィーは、婦長ラチェッドの支配と対決の姿勢を見せ始める。

メカニカルに患者たちを管理していく婦長ラチェッドの支配の手は、彼女の母性によってその姿が隠蔽されており、患者たちは婦長を「慈悲ぶかい天使」(95) として見ることにしかできないでいた。しかし、マックマーフィーはラチェッド婦長を“ball-cutter”(58)、つまり「去勢を施すもの」であると他の患者たちに告げる。ハーディングが言うところの母権制精神病棟における無力な患者たちは、ラチェッドによって男性性を喪失させられていることになる。精神病棟における婦長ラチェッドが行う「去勢」の究極的な方法とは、脳の前頭葉切除、ロボットミー手術を意味する。「コンバイン」に適合できなかったものは病棟に収監され、さらに病棟において治療の効果が期待できない者に対して、コンバインのエージェントであるラチェッド婦長は、最終的に去勢、つまりロボットミー手術を施すことになるのだ。患者たちは婦長の最終的な切り札である「去勢」、つまりはロボットミー手術を怖れ、もの言えぬ被抑圧者の立場にとどまっているのだ。批評家レイモンド・オールダマンは「婦長ラチェッドと同様に、ハーディングの妻、そして、ブロムデンの母、ピリーの母もが去勢を施す存在である」(39) と指摘する。オールダマンの指摘に基づくならば、患者を取り巻く女性のほとんど全てが、男性からマスキュリニティーを剥奪する去勢を施すものとして登場することになる。

病棟へ到来したマックマーフィーは、先陣を切って婦長ラチェッドと対決姿勢を見せるが、その過程において患者たちが男性性を回復していくことは、注目に値する。マックマーフィーが患者たちを海原に連れていき、船でクルーズしながら魚を釣り、患者たちの尊厳を取り戻そうとするシーンの後で、彼らは明らかに変化を見せることになった。マックマーフィーは患者たちに舵を握らせ、巨大な魚との格闘を経験させ、各々に自信を回復させようと試みる。また、男性性を失い、萎縮しきっていた語り手ブロムデンも、マックマーフィーによって男性性を回復していく。

“Oh, man, I tell you, I tell you, you’ll have women trippin’ you and beatin’ you to the floor.” And all of a sudden his hand shot out and with a swing of his arm untied my sheet, cleared my bed of covers, and left me lying there naked. “Look

there, Chief. Haw. What'd I tell ya? You grew a half a foot already.” (212)

マックマーフィーの力によって、次第に自信と尊厳を取り戻していく過程において、「ウサギほどの性的能力も持たない」状態であったブロムデンが性的能力を回復していく様子は、象徴的である。父親的権威が不在であった母権制病棟に、マックマーフィーという父権を具現する人物が現れ、彼の力を借りて患者たちは、少しずつではあるが、婦長に隷属するだけの存在から変化を見せることになる。海での一件の後、マックマーフィーは病室に娼婦を連れ込んでパーティーを開き、さらにビリー・ビビッドに娼婦キャンディーをあてがいさえた。先に述べたように、娼婦キャンディーと性的関係を結んだビリーは、一時的にはあるが、母親との関係がもたらした吃音を克服する。やがて、夜のパーティーの後の無秩序な病棟、ビリーと娼婦キャンディーとの情交を知ったラチェッドの冷徹な反撃を見ることになる。婦長はビリーの不埒な行いを彼の母親に告げると言い、その結果ビリーの吃音は再発し、彼は自殺するに至る。やがてマックマーフィーの婦長との対決がクライマックスに達するのは、彼が婦長のシンボルであった純白の制服を引き裂く瞬間である。

V. 不可視の管理—管理社会のメタファーとしての母性

マックマーフィーたちの反抗は、病棟を支配する“ball-cutter”、婦長ラチェッドに向けられたのであるが、実のところ、彼らの戦うべき相手は、ラチェッド婦長の背後に存在する巨大な組織であったことをブロムデンは指摘する。

McMurphy doesn't know it, but he's onto what I realized a long time back, that it's not just the Big Nurse by herself, but it's the whole Combine, the nation-wide Combine that's the really big force, and the nurse is just a high-ranking official for them. (181)

ブロムデンが言うように、マックマーフィーの、あるいは患者たちの真の敵は、アメリカ全土を覆い尽くす管理社会組織「コンバイン」であった。精神病棟の支配者であるラチェッドは、コンバインの高官に過ぎないのであるから。では、なぜ本作品において、管理社会のエージェントとして、あるいは、コンバインの力を収斂し象徴する存在として、女性であるラチェッド婦長が要請されるに至ったのだろうか。管理社会を牛耳る組織コンバインのエージェントとして、「カッコーの巣」を支配

する者が女性である必然性はあったのか。先行研究から導き出される答えとして、作家の性差別的思想、あるいはミソジニーの感情が、女性であるラチェッドを悪玉支配者として創出させたという結論が導き出される。対抗文化期のアメリカは、女権拡張の風潮が高まりをみせ、女性の社会進出が目覚しかった。女性の社会進出に対する男性側からの一つの反動として、『カッコーの巣の上で』における、強権をもち男性たちを抑圧するラチェッド婦長が要請されたと考えることができる。確かに、ウーマン・リヴに象徴される女性の社会進出の兆し、つまりは父権制に意義申立てを行う新たな流れに対する男性側の恐怖が、男性を抑圧する女性表象を産み出したと考えるのも、あながち的外れではないだろう。しかし、アメリカ対抗文化の流れは明らかに、旧来の体制において抑圧されてきた白人男性中心主義を見なおし、周縁に位置していた者たちを擁護する形で花開いた文化であった。

ポストモダン文学批評家ラリー・マキャフリー (Larry McCaffery) は、1960年代アメリカ対抗文化や女性の運動を取り挙げて「新しい許容性があらゆる場面で顕著になった」(19) と指摘する。マキャフリーが主張する「新しい許容性」を持つことは、アメリカ対抗文化の担い手たちの特徴的なスタンスであったはずであり、それまで父権制のもとで周縁に位置付けられてきた女性たちの声を拾い上げようと試みた。このようなアメリカ対抗文化の理念からは、本作品における女性の扱いは大きく外れていると言わねばならない。マーシャ・フォーク (Marcia L. Falk) は、作品における女性は、「去勢者としての妻、支配的な力を持つ母親、そして絶大な権力を持つ独裁者としての看護婦のような口やかましい、陰謀を企てる悪意ある」(451-452) キャラクターとして描かれていると述べている。Falk が主張するように、本作品に登場する女性は、一様にミソジニックなイメージで描かれている。

本作品において管理社会のエージェントとして、つまり病棟を支配するものとして女性が要請されたことには必然性があると筆者は考える。やはり、コンバインのエージェントは女性でなければならなかった。ブロムデンの語りによれば、アメリカ社会を牛耳るコンバインという組織は、国中にその手を伸ばしており、そのコンバインの機関のひとつとしての、規格外の人間を規格化する工場として精神病院は存在する。精神病院は、理事長、婦長という二人の女性にすべての権限が与えられた母権制的状況にある。では、コンバインという管理社会組織の権力の象徴として、また、そのエージェントとして、何故、女性が要請される必要があったのか。ラチェッド婦長が身に纏う母性こそが、一見すると庇護的であって、気づかぬうちに支配の手を伸ばす管理社会のメタファーだったと考えることはできないか。実際、マックマーフィーに感化される以前の患者たちは、婦長ラチェッドを冷酷な支配者としてではなく、母性に満ちた「慈悲の天使」(95) として捉えていたのだから

ら。管理社会の中で生きる人々は、その支配の巧妙な手口によって自らが体制に取りこまれ、管理されていることに気づかない。バリー・リーズは「コンバインはメカニスティックかつ、母権的機能を持ち、その両者がビッグ・ナースに融合されている」(20)と指摘する。バリー・リーズが指摘するように、婦長が持つ母権的、あるいは母性的な庇護者としての態度は、患者たちがある時点まで婦長を、「慈悲ぶかい天使」(95)と捉えていることから明らかである。ラチェッド婦長が纏う母性という衣は、一方で、メカニカルに患者たちを矯正する管理の様相を不可視化する効果を持っていたのである。物語の終盤、救世主マックマーフィーが婦長の純白の制服を引き裂いたその瞬間に、ラチェッドが巧妙に利用してきた母性という衣は剥がれ落ちた。反体制小説の金字塔とされる本作品は、母性を管理社会の見えない手のメタファーとして定位させている。

物語の結末で、婦長ラチェッドに暴行をはたらいたマックマーフィーは、ロボットミー手術、つまり、彼自身が婦長のもつ最大の強権である“ball-cutting”を受けることになった。ラチェッド婦長との戦いにマックマーフィーが敗北したのち、ハーディングは婦長にはじめて悪態をつき、やがて病棟を出ることになる。また、語り手ブロムデンは、ロボットミー手術を受けたあと、しかばねのように横たわるマックマーフィーを自らの手で葬り去る。そして彼は病棟の中核、いわば、コンバインを象徴するコントロールパネルを破壊し、部族の住む土地、カナダのコロンビア川流域を目指す。

VI. 棄却される母権

これまで本稿で分析してきたように、ラチェッド婦長によって支配されていた母権制精神病院の男性患者たちは、救世主マックマーフィーの到来によって婦長との対決に至る。最終的にマックマーフィーはロボットミー手術を施され、敗北する結果になったが、一時的にはあるが、ピリーは吃音を克服し、ハーディングは婦長に悪態をつき病棟を離れた。聴覚障害者を装っていた語り手ブロムデンは言葉を話し始め、病院から逃亡した。母権制精神病棟の下で無力な存在であった患者たちは、マックマーフィーの力に影響を受けて、母権ラチェッドから離れていくことになったわけである。一連の顛末を鑑みるならば、本作品を語り手ブロムデンによる母権棄却ナラティブとして捉えることができよう。では、ブロムデンによって語られる母権棄却のプロセスが意味するところとは一体何であったのか。

現代ホラー映画における怪物的女性表象について、バーバラ・クリードは、クリステヴァのアブジェクションの概念を援用して以下のように述べている。

Woman's abjection is crucial to the functioning of the patriarchal order... An encounter with the monstrous-feminine of the horror film takes us on an aesthetic and ideological journey... This journey no doubt began in the realm of myth and legend and continues today in its various representations of the monstrous-feminine in film, literature, art poetry and pornography and other popular fictions. (166)

クリードは、女性を棄却することを父権的秩序の重要な機能として捉えており、彼女が言うところの 'monstrous-feminine' とは、今日の芸術全般における女性表象にも見られるという。クリステヴァは『恐怖の権力』において、父なるサンボリックな文明が成立するためには、母なるものにその端を発する「おぞましきもの（アブジェクト）」を棄却することが条件となることを理論化している。

排除される対象は、権力を所持する幻想的な母の権威に結び付く限りでの女性的なものということになる。そして、事実、この母親の権力と分離してはじめてもう一つ別の禁止、こんどは父系制とその宗教に複合する象徴秩序のレベルでの禁止が作り出されるのです。(中略) そもそも人間は例外なく、語る存在となり、昇華能力を身につけるには、母なるものから自己を分離せねばならないという現実にあります。(316-317)

クリステヴァは、母なるアブジェクトの棄却を、父の法によるサンボリックな秩序形成の必要条件として捉えているが、この概念を『カッコウの巣の上で』に見られる母権棄却のプロセスに照らし合わせてみるとどうだろうか。ビリーの過保護な母親、ブロムデンの母、ハーディングの妻という強権を持った女性によって、患者たちは各々物言わぬ無力な存在に甘んじることになり、精神病棟に収監されていた。その精神病棟で彼らは、ラチェッド婦長という圧倒的な権力を持つ女性によって管理されていたが、父権的なマックマーフィーの力を借りて母権を棄却することに成功した。ビリーの吃音は一時的にはあるが回復し、ブロムデンは言葉を語りはじめ病棟を脱出する。ハーディングにしても、婦長に真っ向から異議をとнаえ、病棟を去るに至った。彼らは母権を棄却することによって、クリステヴァが言うように、父なる象徴秩序の中に参入することができたのではないか。クリステヴァは、母なるものを「魅惑的にして忌避すべき」(80) 二面性を持ったものであるとしているが、これはまさに、ラチェッド婦長が持つ「慈悲ぶかい天使」、「絶大な権力を持

つ抑圧者」という二つの面に合致する。患者たちは、ラチェッド婦長の庇護的な母性のベールの下に隠された、抑圧者としての姿に気づかずにいたが、この母権が孕む二面性こそが、気づかぬうちに忍び寄る管理社会のメタファーとして存在していたのだ。

本稿で取り上げた『カッコーの巣の上で』において観察されたような、母権制的状況とその棄却という構図を持ったテキストは、アメリカ対抗文化の流れの中で生み出された複数のテキストに存在する。では、何故 1960 年代のアメリカ対抗文化小説群に、このような構図を持つものが複数存在するに至ったのであろうか。この命題について小谷真理は示唆に富んだ見解を示している。

この未分化を示す「おぞましきもの」は、子供の意識が言語によって形成されると過去のものとして完全に分離・棄却されるわけではない。実は「おぞましきもの」として文明内部、文明を構成する人間の意識内部の見えない領域として潜在している。文明／秩序／人間／男性性／父は、自然／混沌／動物／女性性／母を抑圧して成立しているが、後者は時として文明内部から噴出し「おぞましい」恐怖感を与える。これが去勢恐怖で、母（女）のように去勢されることを恐れるという認識を刷り込まれる。去勢とは、「おぞましきもの」を棄却するという文明の約束事を認識させることを示す。一方、文明／秩序は、その「おぞましきもの」を、あるときは穢れとして排除し、あるときは神聖視して崇めようとする。(50-51)

小谷は、通常は父権制文明の下で隠蔽されている、母なる、あるいは女性的な「おぞましきもの」が「時として噴出する」と指摘している。小谷が言うその契機が、アメリカ対抗文化においては何であったのか。先にも述べたが、女権拡張運動に象徴される女性の地位向上は、父権制を脅かす脅威として、アメリカ対抗文化期に萌芽した。女性の社会進出という男性中心の秩序をゆるがすムーヴメントこそが、平素は文明内部に抑圧されていた母なる「おぞましきもの」の噴出を促す契機になったのではないか。²⁾

本稿でこれまで分析してきた婦長ラチェッドの母性的な面は、コンバインという管理社会組織が画策して構築したものであった。つまり、コンバイン自体が母権制下にあるのではなく、コンバインは母性、あるいは母権を効率よく支配するためのツールとして駆使したのだ。立ちかえってみればラチェッド婦長はコンバインによって製造されたサイボーグとしての身体を持っていた。つまり、ラチェッド婦長の母性とは彼女の生物学的な性に依拠するわけではなく、コンバインが効率良く支

配の手を伸ばすための作られた母性であったのだ。³⁾

以上の論考に基づくと、アメリカ対抗文化のジェンダー・ポリティクスにおける対抗性にも疑問が提起されるべきであろう。本作品に見られるような、父権の権威失墜を描き、母権の棄却を経て父権の再構築を行う過程に真の対抗性を見出すことは難しい。女性の運動を擁護する形で展開したアメリカ対抗文化の枠内にある小説群に、ミゾジニックな女性表象が数多く観察される由縁として、父権の再構築に際して要請される母権棄却というファクターを挙げることができよう。ともすれば、対抗文化が提示した周縁に位置する人々の声を拾い上げる流れ自体、体制を再構築するためのプロセスとして考えることができるのだ。

注

- 1) ケン・キージーは本稿執筆中に他界した。謹んでご冥福をお祈りしたい。
- 2) 精神分析的なアプローチを用いることによって明確になる面も多いが、しかし、クリード、小谷らが依拠するクリステヴァの理論は女性的なものを母性に一元化しすぎる嫌いがあり、ともすると、本質主義一辺倒な議論に陥る危険性を秘めていることは否めない。
- 3) ジャン・ボードリヤール (Jean Baudrillard) は権力機構が母性的、庇護者的姿勢を用いて、表面的には「気前の良さ」を装い、実情はそれを社会統制のメカニズムとして援用しているメカニズムを的確に言い当てている。「社会的転移と母性的転移」を参照されたし。

引用文献

- Creed, Barbara. *The Monstrous-Feminine*. London: Routledge, 1993.
- Falk, Marcia L. "Letter to the Editor of *The New York Times*" 1971. Rpt. in Pratt 450-53.
- Fromm, Erich. "The Significance of the Theory of Mother Right for Today." *The Crisis of Psychoanalysis*. New York: Holt, 1970.
- Kesey, Ken. *One Flew Over the Cuckoo's Nest*. New York: Penguin, 1962.
- Leeds, Barry H. *Ken Kesey*. New York: Frederick Unger, 1981.
- Lupack, Barbara Tapa. *Insanity as Redemption in Contemporary American Fiction*. Gainesville: UP of Florida, 1995.
- McCaffery, Larry. *The Metafictional Muse: The Workes of Rovert Coover, Donald Barthelme, and William H. Gass*. Pittsburgh: UP, of Pittsburgh, 1982.
- Olderman, Raymond M. *Beyond the Waste Land: American novel in the Nineteen-Sixties*. New Haven & London: Yale UP, 1972.
- Vonnegut, Kurt. *Slaughterhouse-Five*. New York: Dell, 1969.
- アーニャ・ルンバ『ポストコロニアル理論入門』（松柏社、2001年）。
- ジュリア・クリステヴァ『恐怖の権力』（法政大学出版局、1984年）。
- フレドリック・ジェイムソン『のちに生まれる者へ』（紀伊国屋書店、1993年）。